

高橋論壇時評は息子に新聞作りに必要なのは真実の探究と教えよ

8.28高橋論壇時評の掲載の二週間後に、9.12朝日が「慰安婦問題」と「吉田調書」報道についての「検証の不十分さ」と「謝罪」を行っているが、その二点を朝日に主張した池上コラムは「掲載拒否」問題が引き続いていることもあって、掲載は不在しており、なにも朝日に主張しなかったどころか、朝日批判を逸らせようとしていた9.25高橋論壇時評のほうはなにもなかったように掲載されている。実際、なにもなかったのであるが、「〈個人的な意見〉」「愛国」の「作法」について」と題された9.25高橋論壇時評は9.12朝日の報道について、なにかを考えようとしているのだろうか。考えようとしているなら、それは「なに」についてなのだろうか。

《学校で「新聞」を作るプロジェクトに参加している小学生の息子が、おれの机の上に積まれていた新聞と雑誌を見つけ、「これ、なに？ 読んでいい？」と訊いてきた。おれは、少し考えて、「止めときな」といった。

「なんで？」

「下品で卑しいものが混じってるから。そのうち、きみはそういうものにたくさん出会うことになるだろうが、いまは、もっと気品があって美しいものを読んでもらいたいんだよ。パパとしては」

「わかった」。そういつて、息子は書斎を出ていった。おれは、なんだかちょっと悲しく、憂鬱だった。

朝日新聞は、二つの大きな「誤報」を作り出した(①②)。「誤報」に関しては、擁護のしようもない。その後の対応も、どうかしている。だから、批判は甘んじて受けるべきだ、とおれは考えていた。机の上にあったのは、その「誤報」を批判するものだった。

その中には、有益なものも、深く考えさせられるものもある。だが、ひどいものも多い。ひどすぎる。ほんとに。罵詈雑言の嵐。そして、「反日」や「売国」といったことばが頻出する。

そんなことばが使われること自体は珍しくない。「前の戦争」のときにおれたちのこの国で、1950年代のアメリカで、旧ソ連時代のロシアで、そして、ナチス支配下のドイツで、「愛国」の名の下に、それに反すると認定された者は、「売国奴」(ときに、「共産主義者」や「人民の敵」ということばも使われた)と呼ばれ、容赦なく叩きのめされ、社会的に(あるいは身体的に)抹殺された。いまでも世界中で、同じことは行われ続けている。いや、気がつけば、おれたちの国では、その「語法」が、「憎しみ」と軽侮に満ち、相手を一方的に叩きのめす「語法」が広がっている。》

卑怯だなあ、というのが読後の第一声である。《おれは、なんだかちょっと悲しく、憂鬱だった。》なんて気取っている場合ではなく、高橋論壇時評も朝日と同様に、《批判は甘んじて受けるべき》なのではないか。少なくとも朝日に対して《批判は甘んじて受けるべきだ》というのであれば、高橋論壇時評もこれまで一度も朝日に対して厳しい批判を向けてこなかったために、今回のように朝日が徹底的に追い詰められる事態に自らも加担してきた点で、同様に《批判は甘んじて受けるべきだ》った。

このような事態が予見できても当然であつただろうのに、高橋論壇時評はこうなることを全く予見しえなかった節穴であつたのに、つまり、時評としての役割を全く果たしえなかった自らの義務と責任を棚に上げて、実際にそうした事態が起こると、朝日に対して《批判は甘んじて受けるべき》であり、おれは関係ないよ、といったそのような態度は卑怯である、と私は思ったのである。「誤報」を生みだした朝日の紙面にこれまで長らくかかり、いまでも高橋論壇時評を執筆してきた責任は問われなくてはならないのに、そのような責任に対する覚悟も痛感もしていないのであれば、そんな緊張感のない高橋論壇時評ならすぐやめたまえ、と勧告したくなってくる。

「誤報」を生みだすような朝日の紙面に執筆することによって、朝日を原稿料と引き換えに支えてきたということもあるだろうが、そのことだけを問うているのではない。高橋論壇時評が時評として本来果たすべき役割をきちんと果たしてこなかったこと、そうであるのに、こういう事態になれば、朝日に対して《批判は甘んじて受けるべきだ》といて自らを免責しようとしていること、その二点において指摘しているのだ。

《朝日新聞は、二つの大きな「誤報」を作り出した》と、まるで人ごとのようにいい、《「誤報」に関しては、擁護のしようもない。》と重ねるが、「誤報」が可視化されていない段階で、高橋論壇時評は

「誤報」をかかえこんできた朝日を擁護しつづけてきたことの責任は免れないのではないだろうか。そうでなければ、「誤報」を朝日が32年間もはらんだまま素知らぬ振りをしてきたことの問題が、朝日が「誤報」であると認めたこと自体が問題であるかのようにすり替えられてしまうだろう。

高橋論壇時評は「誤報」批判のあまりものひどさ（本当にそうだろうと思う）を強調するのに、冒頭から小学生の息子との会話までもちだして、「下品で卑しいもの」ではなく、「もっと気品があって美しいものを読んでいてもらいたい」などという、わざとらしさを読者にも聞かせようとする。しかし、その「下品で卑しいもの」はどこから湧いて出たのか。朝日の報道記事の「もっと気品があって美しいもの」からはるかに隔てられた「下品で卑しいもの」が源流となっているのではないだろうか。

なぜ高橋論壇時評は32年間にわたる「誤報」を思い込まされてきて、自分の考えの重要な一部となってしまう、そして自分の中にこびりついてしまっている「誤報」を自分の中で取り消し、修正していくにも抵抗感をもちながらかなりの年月を要するだろう人々（日本人だけではない）について、どのように考えるのだろうか。「誤報」批判の「下品で卑しいもの」をいったければ、「誤報」の「下品で卑しいもの」を32年間も垂れ流されてきたことの影響についても論じる必要があるだろう。高橋論壇時評の片手落ちの偏差にはかぎりが無い。《学校で「新聞」を作るプロジェクトに参加している小学生の息子》に対して私なら、見かけの「もっと気品があって美しいもの」などよりも、虚言や伝聞に惑わされない真実の探究に貫かれた「新聞」づくりをアドバイスするだろう。

5.20朝日の「吉田調書」報道のときにも、朝日に対して疑問や批判の声が殺到していたのに、高橋論壇時評は取り上げなかったというより、一切無視してきた。要するに、「誤報」の指摘はなされてきたのに、耳を貸さなかった。《罵詈雑言の嵐》の中にも、《有益なものも、深く考えさせられるものもある》ったのに、それらに目を通して考えようとはしてこなかった。なぜなら、朝日を信頼しきっていたからであろう。おそらく高橋自身も《「反日」や「売国」といったことばが頻出する》事態に見舞われることがあったために、朝日がそれらを「悪意の批判」として退けてきたのと歩を合わせるようにして、「下品で卑しいもの」として打ち捨ててきたのであろう。朝日との良好な関係が維持されるなかで同志的な感情も湧いてきただろうし、その感情は《罵詈雑言の嵐》を前にして党派的な結束にまで高まっていくこともあったと推測される。

もしそうであったなら、高橋論壇時評は巨大メディアの朝日の手のひらで共依存関係を築くことになっていったのではないかと考えられる。実際、そのことを窺わせるように、5.20朝日の「吉田調書」報道に対しては、不思議と思われるほど一言も触れていなかった。吉田元所長や原発所員たちにとっては朝日の虚報は紛れもなく「下品で卑しい」そのものであっただろうし、現場で奮闘してきた彼らの命がけの声を遠く想像することもないままに。もちろん、高橋論壇時評自体が朝日がそうであり続けたように、その記事の信憑性を疑ってみる必要もないほどに、外部の批判にも耳を傾けずに「悪意の批判」として退けてしまうほどに、朝日の報道に拘束されていたということである。あらゆる拘束から自由であることが前提とされる時評でなければならないのに、高橋論壇時評が朝日の紙面の掲載であることに拘束されていたとするなら、もちろん、そのような時評にはなにも期待できないし、時評として失当であろう。

8.5～6朝日の「慰安婦報道検証」記事で高橋論壇時評の役立たずはさらけだされたといわねばならない。率直にいう、「検証の不十分さ」と「謝罪」の二点は高橋論壇時評こそが朝日に対して提出しなければならなかったのである。「慰安婦報道検証」記事に対してそのような疑問が募ってこないような高橋論壇時評であるなら、一体なにを時評しているのだろうか。役立たずの高橋論壇時評ではなく、一日遅れの池上コラムがその二点を真っ直ぐ突きつけたからこそ、朝日の対応も動かざるをえなかったのである。そのことへの一片の内省もなく朝日に対して、《その後の対応も、どうかしている。だから、批判は甘んじて受けるべきだ》とは、ヨクいうよ、である。高橋論壇時評こそが「慰安婦報道検証」記事の《対応も、どうかしている》ほど、素通りしてきたのだ。だから、朝日と共に《批判は甘んじて受けるべき》なのである。

さて、高橋論壇時評はここまで書いて、残っているかなりの紙面をどのように埋めていくのだろうか。どうやら頭から離れないのは、「誤報」批判の「下品で卑しいもの」らしく、《「反日」や「売国」といったことば》の頻出から、「売国奴」、「共産主義者」や「人民の敵」という言葉が引き寄せられ、《気がつけば、おれたちの国では、その「語法」が、「憎しみ」と軽侮に満ち、相手を一方的に叩きのめす「語法」が広がっている》ことから、なぜかスーザン・ソントグが詐術として取り出される。